

二〇二二年 二月一日 午前
— 国語 —

第一回一般選抜入試

(五十分／百点満点)

注 意

- ① 指示があるまで開いてはいけません。
- ② 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- ③ 質問がある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気分が悪くなった場合は、だまって手をあげなさい。
- ④ 、。『 “ ” 』はそれぞれ一字と考えなさい。

受 験 番 号		氏 名	
---------	--	-----	--

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

翌朝、保はいつものように早めに家を出た。

外は雨が降っていた。おまけに保のそばには徹兄ちゃんがくっついていてる。兄ちゃんも、子ネコを見たいと言いだしたのだ。そのかわり、ネコのこととは母さんや父さんにないしよにしてやると、言う。

資材置き場にはいると、雨にぬれた雑草が足にまといつき、靴も靴下もびしょぬれになってしまった。

一番奥の四角いパイプのそばまで行って、中をのぞきこむと、シロちゃんが飛び出してきた。保より先に、兄ちゃんが子ネコを抱き上げた。

「へえ、うちのネコと同じくらいだな」

兄ちゃんは、両手でシロちゃんの体を持ち上げて、おなかのあたりをじろじろながめる。

「雄ネコだな」

「兄ちゃん、わかるの」

「そりゃあわかるさ」

今度は両手の中に抱っこして、のどのあたりをさすりはじめた。シロちゃんが目をつむつてのどを鳴らしはじめた。

①「このネコ、どこかの飼いネコかもしれないぜ」

兄ちゃんが保をふりかえる。

「野良ネコなら、人間にならないもの」

「まだ子どもだからじゃないの」

「最初から野良だったら、人間のこと、警戒するんだ。たぶん、このネコは人間の家で生まれたんだ。それで、最初は人間の家で育てられてたんじゃないの。このネコ、おまえたちが見つけたとき、もう歩いてたんだろう」

「わかんない。省ちゃんが見つけたんだ」

「案外、この近くの家の飼いネコかもしれないぞ」

兄ちゃんが、背後の住宅地をふりかえる。

シロちゃんは、最初から省吾になついていたようだから、兄ちゃんの言うとおりかもしれない。

「ま、どっちにしても、今はおまえたちが面倒みてるんだから、関係ないか」

兄ちゃんが、子ネコを地面におろす。

—国語 ①一般_1—

保は、パイプの奥のキャットフードの包みから、エサを取り出して、ボウルに入れてやった。シロちゃんがボウルの中に首をつっこんで夢中でエサを食べはじめた。

兄ちゃんの後ろにくっついて歩きながら、保は考えていた。省吾に兄ちゃんのことを話したほうがいいかどうか。

シロちゃんのこととは、二人だけの秘密にすると、約束したわけじゃないけれど、徹兄ちゃんに打ち明けたことがわかったら、省吾は気を悪くするんじゃないだろうか。まさかと思うが、暴力をふるう可能性もないことはない。

徹兄ちゃんも、シロちゃんのことを気に入ったみたいだ。もしかすると、これからシロちゃんの様子を見にやってくるかもしれない。朝の登校時間なら省吾とかち合うことはないかもしれないが、ひょっとして、放課後も資材置き場に顔を出したりすれば、まずいことになる。

②「やっぱり徹兄ちゃんのことを正直に話しておこう。」

そう決心したとき、保たちは校門の前に到着していた。

二組の教室をのぞくと、省吾が友だちと話しているのが見えた。

「倉橋くん」、保が呼ぶと、省吾はすぐさまこちらに走ってきた。

「どうした。シロちゃんになにかあったのか」

「あ、いや、シロちゃんは、元気だったけど……。ちょっとまずいことがあってね。うちの兄ちゃんにばれちゃってさあ。今朝、資材置き場にくっついてきたんだ」

そつと省吾の顔を見たが、べつに機嫌を悪くした様子はなかった。

「そうか、兄貴に見つかっちゃったのか」

③「そこで、軽くため息をついた。」

「ごめん……」

保が頭を下げると、省吾は首をふった。

「べつにあやまることないさ。じつは、おれもシロちゃんのこと、クラスのやつにばらしちゃったから。ほら、おまえんちの近くに住んでる水島かおり。このあいだの日曜に、おれたちが空き地でシロちゃんと遊んでるところを見られたらしいんだ。それで、しつこく聞くから……。空き地につれてってくれて言うから……」

水島かおりなら小さい時から知っている。今は省吾と同じ二組だが、幼稚園もいっしょだ。一、二年のとき同じクラスだったし、家も同じ天神西町のアパートだ。

「あいつもネコが好きなんだって。でもアパートだから飼えないんだ。おまえさえよかった

—国語 ①一般_2—

ら、仲間に入れてやってもいいかなって思ったんだけど」

④ 省吾がちょっときまりわるげに言った。

「水島ならかまわないんじゃないの。家も近くだから。でも、友だちにはしゃべらないように、注意しといたほうがいいよ。大勢でやってこられると、目立つもの」

「そうだな。今度の土曜日、あそこに泊まることは、絶対に秘密にしようぜ」

放課後になると雨がやんで、薄日がさしはじめた。いつものように自転車をとばして資材置き場に行くと、省吾の自転車のそばにピンク色の自転車がとまっていた。

山際のコンクリートパイプのそばにTシャツの女の子が立っていた。水島かおりだということはショートボブの髪形ですぐにあった。かおりがパイプの中をのぞきこみながら、なにかしゃべっている。やがてパイプの中からシロちゃんを抱いた省吾が現れた。

保がそばに近づくと、二人がいっしょにふりむいた。

「タモちゃんたち、ここでネコ飼ってたんだ」

先に口を開いたのはかおりだった。

「あたし、前からおかしいなって見てたんだもの」

そこで今度は省吾のほうをふりかえった。そして省吾の腕の中から子ネコを抱き上げて、ほおずりはじめた。

「シロちゃん、今日は雨が降ってたから、ずっとこの中にいたみたいだぜ。雨が嫌いなんだな。」

省吾が保に報告した。

「ネコは、雨が嫌いなんだよ。水にぬれるのがいやなんじゃないの」

そんなことを言いながら、保は、ちよつとつまらない気分だった。かおりのことは、省吾から聞いていたけれど、まさか二人だけで、先に来てるとは思っていなかったからだ。

「このネコ、タモちゃんちのネネちゃんと同年じゃないの」

ネコを抱きながら、かおりが保をふりかえる。

「たぶん、今年の春生まれなんだろうな。雄だって。兄ちゃんが言ってた」

「あら、雄なの。困ったなあ。あたし、白いネコだって聞いたから……」

話しながら、かおりは子ネコをそつと地面におろして、ポケットの中からなにか取り出した。布製の赤い首輪だった。かおりは、首輪を子ネコの首に巻きつける。子ネコはいいやするように首を左右にふりはじめたが、かおりは片手でネコの体を抱くようにして、なんとか首輪をはめた。

「雄ネコが、赤い首輪してても、べつにおかしくないんじゃないのか。うん、これならシロ

ちゃんのこと、だれも野良ネコだって思わないぜ」

省吾がうれしそうに言った。

かおりは、翌朝から保の家にやってくるようになった、もちろんシロちゃんの世話をするためだ。

シロちゃんは、早起きだ。保たちが資材置き場にやってくるころには、どこかに遊びにかけていることが多い。

呼べどこからともなく姿を現し、保たちのそばにかけてくるのだけれど、いくら呼んでも帰ってこない時があった。

その日も、シロちゃんは帰ってこなかった。

仕方がないので、パイプの中に朝ごはんを用意して、そのまま学校に行くことにした。

「シロちゃん、どこに行ったのかしら、迷子になったんじゃないの」

かおりが、何度も後ろをふりかえるけれど、保はそれほど心配していなかった。保の家のネネも、最近は母親のミミからはなれて、一人で遊びに出かけることが多い。一日中家にいないこともあるが、夕方になると必ず戻ってくる。

保には、シロちゃんのことより、もっと気がかりなことがあった。

今日は金曜日だ。明日は省吾と二人で、資材置き場でキャンプする約束になっている。でも、そのことはかおりには秘密にしているのだ。

「ええとさあ。水島は、明日はどうするの。家族でどこかに出かけたりしないの」

それとなく聞いてみたが、かおりはにつこり笑って答えた。

「どこにも行かないわ。一日中シロちゃんと遊ぶ」

明日は省吾とキャンプの準備をするつもりだ。家から毛布とか食器とか、持ち出して、資材置き場に運ばなくてはならない。かおりのいる前で、そんなことをすれば、たちまち秘密計画がばれてしまうにちがいない。

昼休み、保は省吾に相談してみた。

「水島は、明日は朝からシロちゃんと遊ぶって言ってるけど、どうする」

省吾が、目をむいた。

「明日はキャンプの準備しなくちゃならないんだぞ。水島がそばにくっついてたら、ばれちゃうじゃないか」

「それからさあ、ぼくたちがあそこでキャンプすること、家にもないしよにするんだろ。省ちゃん、家の人になんて言うの」

「それならかんたんさ。おれ、タモちゃんちに泊まりに行くって言うつもり。タモちゃんも、おれんちに泊まるって言えばいい」

「だいじょうぶかなあ。ぼくの母さん、省ちゃんちに電話するかも。子どもがお世話になりますって、お礼を言うかもしれないよ」

「だったら、こうしろよ。夕方から外で食事してるから家にはいないって、言っとけばいいのさ。おれはそう言うつもりだぜ」

なるほど、それなら母さんも省吾しやうごの家に電話しないかもしれない。

「とにかく、ぎりぎりまでだまってたほうがいいぞ。出かける前におれんちに泊まることになったって言うんだ」

⑦ 家のほうは、なんとかごまかせそうだが、問題はかおりだ。

省吾がため息をついた。

「仕方ないな。あいつには、キャンプのこと、話してやろう。そのかわり、秘密をばらしたらシロちゃんと遊ばせないっておどかさうぜ」

(那須正幹『秘密基地のつくりかた教えます』)

問一

① 「このネコ、どこかの飼いネコかもしれないぜ」とありますが、兄ちゃんがシロちゃんが飼うネコかもしれないと言ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア シロちゃんが、近くの家で飼われているのを見たことがあるから。

イ シロちゃんは、保が飼っているネネと同じくらいの大きさだから。

ウ シロちゃんは、近くの家で飼われているはずのネコだと思ったから。

エ シロちゃんが野良ネコならば、人間になれていないはずだから。

オ シロちゃんは、省吾が見つけたときはもう歩いていたから。

問二

② 「やっぱり徹兄ちゃんのことを正直に話しておこう」とありますが、保が正直に話そうと思ったのはなぜですか。その理由を二十〜三十字で答えなさい。

問三 ③ 「軽くため息をついた」とありますが、この時の省吾の様子として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 保の兄貴がシロちゃんにいたずらをするのではないかと心配している。

イ 保が自分以外の人にシロちゃんのことを話したことにならだっている。

ウ 保からシロちゃんの元気がなかったことを聞いて不安になっている。

— 国語 ①一般_5 —

問四

エ 保が自分に何も言わずに兄貴に話したことで機嫌が悪くなっている。

オ 自分以外の人たちにシロちゃんのことを知られてがっかりしている。

④ 「省吾がちよっとときまりわるげに言った」とありますが、この時の省吾の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 水島かおりが他の人にシロちゃんのことを教えてしまうのではないかと不安に思っている。

イ 自分も保と同じように他人にシロちゃんのことを話してしまい、気まずいと思っている。

ウ シロちゃんのことを自分から無理矢理聞き出した水島かおりを許せないと思っている。

エ 水島かおりにシロちゃんのことを話したことで、保が自分に暴力をふるうかもしれないと心配に思っている。

オ 土曜日に泊まることも水島かおりに話してしまったが、保にはまだ言えないと思っている。

問五

⑤ 「保は、ちよっとつまない気分だった」とありますが、なぜ保はそのような気分だったのですか。その理由を二十〜三十字で答えなさい。

⑥ 「保はそれほど心配していなかった」とありますが、なぜ保は心配をしていないのですか。その理由を三十五〜四十五字で答えなさい。

⑦ 「省吾がため息をついた」とありますが、この時の省吾の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 水島かおりにかくしてキャンプの準備をするのは無理だとあきらめ、キャンプのことを話そうと思っている。

イ 保の言うとおり、家の人が電話してしまい、キャンプのことがばれてしまうことを不安に思っている。

ウ 水島かおりにキャンプのことをかくすのが無理ならば、キャンプにさそってしまいたいと思っている。

エ 水島かおりがキャンプのことを知れば、家の人にも知られてしまうので、話したくないと思っている。

オ 家の人にもキャンプのことはかくし通せないと思い、キャンプはあきらめるしかないと思っている。

— 国語 ①一般_6 —

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

古代中国の思想家・孫子^{そんし}という人は「戦わずして勝つ」と言いました。

孫子だけでなく、歴史上の偉人^{いじん}たちは「できるだけ戦わない」という戦略にたどりついて
いるのです。

偉人たちは、どうやってこの境地^{*}にたどりついたのでしょうか。

おそらく彼ら^{かれ}はいつぱい戦ったのです。そして、いつぱい負けたのです。

勝者と敗者がいたとき、敗者はつらい思いをします。どうして負けてしまったのだろうと
考えます。どうやったら勝てるのだろうと考えます。

彼らは傷つき、苦しんだのです。

そして、ナンバー1になれるオンリー1のポジションを見つけたのです。

そんなふうに「戦わない戦略」にたどりついたのです。

生物も、「戦わない戦略」を基本戦略¹としています。

自然界では、激しい生存競争^{せいぶんきょうそう}が繰り広げられます。生物の進化の中で、生物たちは戦い続
けました。A、^{おのの}各々の生物たちは、進化の歴史の中でナンバー1になれるオンリー1の
ポジションを見出^{みいだ}しました。そして、「できるだけ戦わない」という境地と地位にたどりつ
いたのです。

① ナンバー1になれるオンリー1のポジションを見つけるためには、^{みな}若い皆さんは戦つても
いいのです。そして、負けてもいいのです。

たくさんさんのチャレンジをしていけば、たくさんさんの勝てない場所が見つかります。こうして
ナンバー1になれる場所を見つけていくことが、最後にはナンバー1になれる場所を絞^{しぼ}
込んでいくことになるのです。

ナンバー1になれるオンリー1のポジションを見つけるために、負けるということですよ。

学校では、たくさんさんの科目を学びます。得意な科目も、苦手な科目もあることでしょう。

得意な科目の中に苦手な単元があるかもしれませんし、苦手科目だからと言ってすべてが苦
手なわけではなく、中には得意な単元が見つかるかもしれません。学校でさまざまなことを
勉強するのは、多くのことにチャレンジするためでもあるのです。

苦手なところで勝負する必要はありません。^{いや}嫌なら逃げてもいいのです。

B、無限の可能性のある若い皆さんは、^{かん}簡単に苦手だと判断しないほうが良いかもし

— 国語 ①一般_7 —

れません。

ペンギンは地面の上を歩くのは苦手です。しかし、水の中に入れば、まるで魚のように自
由自在に泳ぎ回ります。アザラシやカバも、地上ではのろまなイメージがありますが、水の
中では生き生きと泳ぎ始めます。まだ進化することなく、地上生活をしていた彼らの祖先た
ちは、まさか自分たちが水の中が得意だとは思ってもいなかったでしょうし、C 自分た
ちの祖先が水中生活を得意としていたとは思わなかったことでしょう。

リスは、木をすばやく駆け上^あがります。しかし、リスの仲間のモモンガは、リスに比べる
と木登りが上手とは言えません。ゆっくりゆっくりと上がっていきます。しかし、モモンガ
は、木の上から見事に滑空^{かつくう}することができます。木に登ることをあきらめてしまつては、空
を飛べることに気がつかなかったかもしれません。

人間でも同じです。

サッカーには、ボールを地面に落とさないように足でコントロールするリフティングとい
う基礎練習^{きそれんしゅう}があります。しかし、プロのサッカー選手でもリフティングが苦手だったとい
人もいます。リフティングだけで苦手と判断しサッカーをやめていたら、強力なシュートを
打つ能力は開花しなかったかもしれません。

小学校では、算数は計算問題が主です。しかし、中学や高校で習う数学は、難しいパズル
を解くような面白^{おもしろ}さもあります。大学に行つて数学を勉強すると、抽象的^{ちやうしき}だったり、この
世に存在しえないような世界を、数字で表現し始めます。もはや哲学^{ていがく}のようです。計算問題
が面倒^{めんどろ}くさいというだけで、「苦手」と決めつけてしまうと、数学の本当の面白さに出会う
ことはないかもしれません。

勉強は得意なことを探すことでもあります。苦手なことを無理してやる必要はありません。
最後は、得意なところで勝負すればいいのです。しかし、得意なことを探すためには、すぐ
に苦手と決めて捨ててしまわないことが大切なのです。

* 一時間目にしたオナモミの話を覚えていますか？

オナモミは、早く芽を出したほうが良いとか、遅く^{おそ}芽を出したほうが良いとか、簡単に判
断^{さだ}めませんでした。そして、オナモミはどうしたでしょう。

そうです。^{*} オブションとして両方持っておくという方法を選択^{せんたく}したのです。

これは得意だとか、これは苦手だとか、簡単に決めてしまつてはもったいないことです。

雑草のように、苦手なものもオブションとして捨てないことも大切なのです。

勝者は戦い方を変えません。その戦い方で勝つたのですから、戦い方を変えないほうが良

— 国語 ①一般_8 —

いのです。負けたほうは、戦い方を考えます。そして、工夫に工夫を重ねます。負けることは、「考えること」です。そして、「変わること」につながるのです。

③ 負け続けるということは、変わり続けることでもあります。生物の進化を見ても、そうです。劇的な変化は、常に敗者によってもたらされてきました。

古代の海では、魚類の間で激しい生存競争が繰り広げられたとき、戦いに敗れた敗者たちは、他の魚たちのいない川という環境に逃げ延びました。もちろん、他の魚たちが川にいなかったのには理由があります。海水で進化をした魚たちにとって、塩分濃度の低い川は棲めるような環境ではなかったのです。しかし、敗者たちはその逆境を乗り越えて、川に暮らす淡水魚へと進化をしました。

しかし、川に暮らす魚が増えてくると、そこでも激しい生存競争が行われます。戦いに敗れた敗者たちは、水たまりのような浅瀬へと追いやられていきました。そして、敗者たちは進化をします。

ついに陸上へと進出し、両生類へと進化をするのです。

懸命に体重を支え、力強く手足を動かし陸地に上がっていく想像図は、未知のフロンティアを目指す闘志にみなぎっています。

しかし最初の上陸を果たした両生類は、けっして勇気あるヒーローではありません。追い立てられ、傷つき、負け続け、それでも「ナンバー1になれるナンバー1のポジション」を探した末にたどりついた場所なのです。

やがて恐竜が繁栄する時代になったとき、小さく弱い生き物は、恐竜の目を逃れて、暗い夜を主な行動時間にしていました。と同時に、恐竜から逃れるために、聴覚や嗅覚などの感覚器官と、それを司る脳を発達させて、敏速な運動能力を手に入れました。そして、子孫を守るために卵ではなく赤ちゃんを産んで育児するようになりました。それが、現在、地球上に繁栄している哺乳類となるのです。

人類の祖先は、森を追い出され草原に棲むことになったサル仲間でした。恐ろしい肉食獣におびえながら、人類は二足歩行をするようになり、命を守るために知恵を発達させ、道具を作ったのです。

生命の歴史を振り返ってみれば、進化を作りだしてきた者は、常に追いやられ、迫害された弱者であり、敗者でした。そして進化の頂点に立つと言われる私たち人類は、敗者の中の敗者として進化を遂げてきたのです。

生命の歴史を見れば、進化の原動力になったものは、常にニッチを探し求めた敗者たちのチャレンジだったのです。

生物の世界はナンバー1しか生き残ることができません。激しく競い合い、争い合い、敗れ去って滅びた生き物もあります。

幸い、私たちの暮らす現代の人間社会は、どんなに競争社会とは言っても、そこまで厳しいことはありませんね。負けたからと言って、命を失うわけではありませんし、絶滅してしまいうわけでもありません。ならば、恐れることなく、大きなチャレンジをしても良いかもしれません。

しかし、生物の世界はそうではありません。負ければ命を奪われたり、滅んでしまうこともあります。現在、生き残ってきた生物は、負けることはあっても、致命的になるような大きな負け方はしてこなかったはずです。

負けることは変化するために効果的です。しかし、ただ負ければ良いというものでもないでしょう。あまりにダメージの大きい負け方をすれば、立ち直れなくなったり、大きな傷を負ってしまいます。

勝てそうか負けそうかを見極めて、負けると判断したら、無理せず負ける。そんな小さなチャレンジと小さな負けを繰り返すことが大切なのかもしれません。

自然界の動物たちは戦いません。戦いに負けることは滅びることを意味しているからです。しかし、Xを繰り返します。

小さな勝ちを繰り返したり、次にチャンスがあるような負けを繰り返します。こうしてニッチを探し求めていくのです。

(稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる』)

* 境地……心の状態。

* オンリー1のポジション……ここでは、そのものにしかできない二つとない特別な生き方。

* 一時間目にしたオナモミの話……本文の前に、オナモミというトゲトゲした実を持つ雑草のことが取り上げられている。

* オプシオン……ここでは、選ぶことができるゆとりやそのもの。

* フロンティア……新しい分野。

* ニッチ……ここでは、ある生物がナンバー1になれるオンリー1のポジション。

問一

A C にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。(二度ずつしか使いません。)

- ア それとも イ そして ウ なぜなら エ さらに
オ さて カ しかし キ つまり

問二

①「ナンバー1になれるオンライン1のポジションを見つけるためには、若い皆さんは戦つてもいいのです。そして、負けてもいいのです」とありますが、なぜ負けてもいいのですか。その理由を五十〜五十字で答えなさい。

問三

②「簡単に苦手だと判断しないほうが良いかもしれませんが、それはなぜですか。その理由を二十五〜三十字で答えなさい。

問四

③「負け続けるということは、変わり続けることでもあります」とありますが、変わり続けた結果、生物はどのようなことにつながりますか。本文中より漢字二字で抜き出して答えなさい。

問五

X にあてはまる言葉を本文中より六十十字で答えなさい。

問六

1「生物も、『戦わない戦略』を基本戦略としています」とありますが、自然界において生物が戦わないのはなぜですか。その理由を本文全体の中より二十〜二十五字で抜き出して答えなさい。

問七

本文の内容に合うものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア モモンガは、木の上から滑空するために、木に登る能力をのびした。
イ オナモミは、長い進化の過程で、遅く芽を出すタイプが生き残った。
ウ 生命の進化は、敗者たちが生き残ることができる方法を探した結果である。
エ 自然界では、激しい生存競争をさけるため、ゆずりあつて生活している。
オ 大学で数学を学ばない限り、数学の面白さを味わうことはできない。

【三】

次の①〜⑩の の漢字はひらがなに、カタカナは漢字になおしなさい。

- ① 絹針 のように細い雨。
② 貴重品を預かる。
③ 大臣を護衛する。
④ 今いる会社を辞職する。
⑤ 干潮 とともに現れた島。
⑥ 独特のカメラで投げる。
⑦ 線にソつて並べる。
⑧ タンサンスイばかり飲む。
⑨ 座談会をロクオンする。
⑩ 社長にシュウニンする。

問二				問一
				A
				B
				C

【二】

問七	問六			問五		問四	問三	問二		問一

【一】

⑨	⑦	⑤	③	①
する	つて		する	
⑩	⑧	⑥	④	②
する		え	する	かる

【三】

問七	問六	問五	問四	問三	

受験番号		氏名		得点	
------	--	----	--	----	--